

中国社会学の性格についての覚書

—とくに、その回復後3年間（1979年～1981年）の年譜から—

星 明

中国で、「私の専門は社会学です」と答えると、「社会科学ですか?」と聞き返されることになんどもあった。それも、一般の人ではなくて、研究者からである。清水幾太郎は、かつて（1954年）ソ連で、ある哲学の大学教授から「ソチオロギカというのは、どういう学問なのですか」、「社会学というのは、何を研究する学問なのですか」と真面目に聞かれ、「今日社会学の中心は、集団の研究が立っています」と答えたところ、その教授から「集団とは何ですか。なぜ集団を研究するのですか」と再び質問された体験談を書いている¹⁾。清水はこの体験談をかれの著『社会学入門』の導入にもっている。

しかし、筆者には「社会科学ですか?」という聞き直しに対して「社会学とはなにか」ということよりも、むしろ(1)中国の社会学が現在どのような状況にあるのか、また(2)かつてそれがどのような状況にあったのかということに直ちに思いが走った²⁾。したがって、ここ

では前者の一部を示すために社会学回復後3年間（1979年～1981年）の年譜を訳出し、後者の一端を文献の上から表すために上海図書館所蔵の解放前の社会学関係の文献目録を作成した。こうしたことを行なうのも、中国の社会学(史)について（延いては中国人の社会生活の実態やかれらの意識の社会学的研究について）、現段階では（筆者の能力はもちろんのことであるが、中国側のデータ開放の現状）、少ない資料で多くを語るよりも、まず地道な資料の収集が先決と著者は考えているからである。

まず、はじめに中国社会学史の概略をみておきたい。中国の社会学がいつ成立したかについては、いくつかの見解がある。解放前の中国の社会学界にもっとも影響を与えたといわれる孫本文は章炳麟によって岸本能武太の社会学が翻訳された1902年（光緒28年）をもって、中国の社会学の成立としている³⁾。また、費孝通⁴⁾と福武直⁵⁾は嚴復がH. スпенサーの The Study of Sociology（1873年）を訳した『群学（羣学）

表1 1940年代までの中国における社会学著作分類

類 別	部数	類 別	部数
1. 一般社会学	44	5. 社会思想と社会学史	19
2. 社会進化論と社会変動	19	(1) 社会思想	8
3. 社会問題	90	(2) 社会学史	11
(1) 通論	18	6. 農村社会学	8
(2) 人口問題	27	7. 都市社会学	9
(3) 家族問題	14	8. 社会学方法	20
(4) 労働問題	9	9. 社会事業と社会政策	25
(5) 農村問題	11	10. その他の社会学研究	23
その他	11	11. 社会実地調査	45
4. 社会心理学	21		

出所：韓明漢が孫本文の『当代中国社会学』をもとに、作成したものを重引。韓明漢はこの孫本文の分類にはマルクス主義社会学の著作は含まれていないという。韓明漢『中国社会学史』—社会学叢書一、天津人民出版社、1987年、107ページ。

肆言』が刊行された1903年に中国の社会学は始まるとしている。なにを基準にするかによって、成立の時期に違いがでるが、いずれにせよ1890年代から1900年の初めにかけて中国に社会学が成立した。それから、一旦幕が下りるまでの約50年間の中国の社会学には目覚しいものがあった。孫本文が1948年に著した『当代中国社

会学』⁶⁾によれば、その時期までにすでに翻訳も含めて300部余りの著作があったことがわかる(表1参照)。

また上の表1のなかには、つぎのような世界的に著名な社会学者の翻訳が約20部含まれている(表2参照)。

表2 1940年代までの中国における外国社会学著作の翻訳

著者・訳者	原題・書名	発行所	発行年
H. Spencer 嚴復 馬君武	The Study of Sociology Principles of Sociology 群学肆言 社会学原理		1873 1876~96 1903 1903
F. H. Giddings 吳健常	Theory of Socialization (ママ) 社会学提綱 (日本語訳からの重訳)	商務版	1903
E. Durkheim 王力 許德珩	De la division du travail social : étude sur l'organisation des sociétés supérieures Les règles de la méthode sociologique 社会分工論 社会学方法論	商務版 商務版	1893 1895 1935 1925
C. A. Ellwood 趙作雄	Sociology and Modern Social Problems 社会学及社会問題	商務印書館	1910 1910
J. L. Gillin & F. W. Blackmar 周谷城 陶集勤 吳澤霖・陸德音	Elements of Sociology 社会学大綱 社会学原理 白季二氏社会学大綱	大東書局 新文化書店出版 世界書局	1905 1933 1942 1937
F. C. Müller-Lyer 陶孟和	The History of Social Development (ママ) 社会進化史 文化的変象 原書8冊, そのうち訳は2冊 進歩的趨向	— — —	— 1924 — —
L. H. Morgan 蔡和森編 楊東莼等	Ancient Society, or Researches in the Line of Human Progress from Savagery, through Barbarism to Civilization 社会進化史 古代社会	民智書局 昆侖書店出版	1877 1924 1929
R. H. Lowie 呂叔湘	Primitive Society 初民社会	商務印書館出版	1920 1935
P. A. Sorokin 黄文山 鐘兆麟	Contemporary Sociological Theories Social Mobility 当代社会学說 社会變動論	商務版 世界書局出版	1928 1927 1935 1932

W.F.Ogburn 費孝通・王同惠	Social Change 社会変遷	上海商務印書館	1922 1935
G. Le Bon 呉旭初 鐘建閔	Psychologie des Foules 群衆心理 群衆	商務印書館出版 泰東書局	1895 1920 1920
W. McDougall 劉延陵	An Intoroduction of Social Psychology 社会心理学緒論	商務印書館出版	1908 1922
F. H. Allport 趙演	Social Psychology 社会心理学	商務印書館出版	1924 1931
E. S. Bogardus 鐘兆麟 徐卓英・顔潤卿	A History of Social Thought 社会思想史	世界書局出版 商務印書館出版	1922 1932 1937
F. Tönnies 波多野鼎 楊正宇	Gemeinschaft und Gesellschaft : Begriffe der reine Soziologie 共同社会与利益社会（波多野訳からの重訳）	太平洋書局出版	1887 —
T. Abel 黄凌霜	Systematic Sociology in Germany 系統社会学	華通書局	1927 1932
B. K. Malinowski 李安宅	Sex and Repression in Savage Society 両性社会学	商務印書館出版	1927 1937
K. Mannheim 李安宅	Ideology and Utopia : an introduction to sociology of knowledge 知識社会学 — 意態与理想 — (ママ)	商務印書館出版	1929 1944
B. K. Malinowski 費孝通	Culture (ママ) ((A Scientific Theory of Culture, and Other Essays か…星註)) 文化論 (ママ) ((人文類型か…星註))	重慶商務印書館	1944 1944

出所：表1と同じ，108～110ページ。ただし，原題については福武直・日高六郎・高橋徹編『社会学辞典』（有斐閣，1973年）；S. L. Wong, *Sociology and Socialism in Contemporary in China*, 1979, Routledge & Kegan Paul. などで補った。

このような中国の社会学の発展について福武直は「社会学の概説書も，30年代にはかなりの数にのぼったが，とくに私の専門とした農村社会学や社会調査の書物は，その刊行点数において，はるかに日本のそれを上まわっていた…」とか，「…中国の社会学は，1930年以降大きく開花し，分野によっては日本の社会学以上の業績をあげていたとみてよいし，英文の刊行物を通じ，日本社会学よりも，かるかに国際的に知られるようになっていた」と述べている⁷⁾。

このような多くの社会学の著作が生まれた背景にはつぎの3つが考えられる⁸⁾。すなわち，1つには欧米や日本への留学生の増加がある。

たとえば，ヨーロッパには嚴復（英国），陶孟和（英国・ロンドン大学），費孝通（英国・ロンドン大学），許德珩（パリ，ロンドン），アメリカへは孫本文（イリノイ大学，コロンビア大学，ニューヨーク大学），呉文藻（コロンビア大学），李安宅（カリフォルニア大学），日本には章炳麟（別名，太炎），吳建常，陶孟和（東京高等師範）などがある。2つには社会学部をもつ大学の増加がある。1934年当時，中国の41の大学のうち社会学部をもつ大学は17校（国立4，地方公立1，私立12）であったが，14年後の1948年には49の大学のうち社会学部をもつ大学は21校に増えている（表3参照）。3つには中

国人社会学者の増加がある。1908年には上海聖
翰大学 (St. Jhon's University) に社会学課程
が設置されて、また1913年に上海滬江大学
(Shanghai University) に社会学部が設置され

杖以来、多くの大学に社会学部ができ多くの社
会学者が養成された。1948年、大学おける社会
学の教員数は119名であるが、5人を除いてす
べて中国人である。

表3 1948年当時の中国の大学における社会学

大学のタイプ	大学数	社会学部をもつ大学数	専攻のみをもつ大学数	教員数*
国立・地方公立	31	7	6	47
私立	18†	14	1	72
計	49	21	7	119

*教授、助教授、講師を含む。

†プロテスタント系大学13校、カソリック系大学3校がある。

出所：S. L. Wong, *Sociology and Socialism in Contemporary in China*, 1979, Routledge & Kegan Paul. p. 20. なお1934年当時、社会学部17の内訳は国立4、地方公立1、私立12で、社会学専攻の学生数は全大学生数の7%、483名（国立239、地方公立4、私立240）であった（S. L. Wong, *ibid.*, p. 19.）。

中国の社会学は1952年から57年にかけて取り
消された。その理由として張萍はソ連の左傾教
条主義の影響以外に⁸⁾、中国社会科学院院長胡
繩が1986年4月26日に中国社会学学会常務委員
会で行った講話からつぎの2つを挙げている。
すなわち、(1) 史的唯物論をもって社会学に
とって代えることができるとみなしたこと、(2)
革命が勝利したからには全ての社会問題がスラ
スラと解決されるとみなしたことである¹⁰⁾。

しかし、27年間の中断を経た中国社会学も、
1979年3月に回復した。その時のことについて
は、人民日報（1979年3月21日付）や福武直¹¹⁾
によって紹介されているし、筆者も触れたこと
がある¹²⁾ のでここではあえて触れないが、1979
年3月15日から18日の60人が参加した回復のた
めのイベントに先立つ情況には触れておきたい。

韓明漢はこの回復に至るまでの助走について
つぎの3つを挙げている¹³⁾。(1) 1978年12月の中
国共産党第11期中央委員会第3回会議の党の路
線、方針、政策の大きな変化。つまり、一口で
いうとマルクス=レーニン主義、毛沢東思想を
新たな歴史的条件のもとで運用し、発展させる
ことである。この党と国家の日増しに発展する

勝利の記録のなかに、1つの目につきにくいこ
とばがあった。このことばこそ社会学であっ
た。ここに社会学の教学と科学研究は活動を回
復した。(2) 1978年11月、中国社会科学院はど
のようにして新しい研究所を増設し、古い研究
所を改革するかを考えつつあった。国家の建設
が必要な時を迎えて、社会学研究所を成立させ
る問題を考えつつあった。(3) 1979年3月20日
の鄧小平の「4つの基本原則を堅持しよう」の
第3部分の「思想理論活動の任務」の講話がな
される前に、すでに中国社会科学院計画連絡局
の名義で、費孝通が委託されて過去に社会学の
教育・研究に携わった中高年の学者約30人を北
京に召集し、4回に分けて座談会をもち、社会
学研究を展開することについての意見を求めて
いる。この座談会の出席者は目下中央は乱世を
治めて正しい世にかえているし、改革は人の心
を捉えているので、情勢は非常によいと考えた。
中国社会科学院がこの機を逃さず社会学の
研究を提出し、展開することは是非必要なこと
であると、出席者は心から支持した。社会学の
名誉を回復し、さらに多くの人に参加し、団結
するためにマルクス=レーニン主義、毛沢東思
想を指導として社会主義の4つの現代化の建設

のために奉仕する社会学を支持し、建立する。そのためには、規模の大きな社会学座談会を開催することが時機になっているし、また必要であると出席者は考えた。この事前の座談会を踏まえて、1979年3月15日から18日の座談会が開催されたのである（会の主宰は、中国社会科学院秘書長梅益）。

上にみた中国社会学の歴史的変遷はつぎの5つの時期にごく大雑把に分けることができる。すなわち(1)1890年代ないし1900年初期の成立の時期（受容期）、(2)1910年代から1930年までの時期（教会系大学の社会学期）、(3)1930年代から1948年までの時期（中国化期）、それから(4)1952年から1979年までの時期（空白期）を経て、(5)1979年3月から現在までの時期（回復期）である。

それでは、以下、1979年から1981年までの中国社会科学院社会学研究所編集部王育民編著の中国社会学年譜および上海図書館所蔵の解放前の社会学に関する文献目録を挙げる。

註

- 1) 清水幾太郎『社会学門』、光文社、1959年、17～23ページ。
- 2) 費孝通著・星明訳「社会学について再び語る」(『ソシオロジ』、第108号、1990年5月)はこの2つの問題を考えさせてくれる。
- 3) 何維凌・黄曉京『通往社会科学的前沿—社会学の探求』(社会科学の最前方に向かって)、四川人民出版社、1987年、208～209ページからの重引。

- 4) 費孝通「中国社会学の発展」、『社会学研究』、第1巻、第3集、1948年、177～189ページ。
- 5) 福武直「中国の社会学とその復活」、『社会学評論』、第30巻、第2号、1979年、60ページ。
- 6) 孫本文の『当代中国社会学』は、勝利出版公司から1948年に出版され、1948年以前の中国社会学史を研究した重要な著作とされている。
- 7) 福武直、前掲論文、60～61ページ。
- 8) この3つの要因は S. L. Wong, *Sociology and Socialism in Contemporary in China*. 1979 Routledge and Kegan Paul, Ch. 1 “The Growth of sociology in pre-Liberation China” に述べられている事実をもとに筆者が挙げた。
- 9) S. L. Wong もつぎのようにいう。「教育部では、1951年、社会学の学問上の地位を一時保証したけれども、ロシアでは社会学は大学組織のなかにも、カリキュラムのなかにもないというロシア人の教育専門家の意見によって、中国の社会学は影が薄くなってしまった」(S. L. Wong, *ibid.*, p. 43)。
- 10) 張萍著、田辺義明訳・加々美光行監訳「中国社会学—現状と課題—」、中久郎・梶谷素久編『社会学グローバル』、御茶の水書房、1987年、215ページ。新田光子解説。
- 11) 福武直、前掲論文、63～67ページ。
- 12) 星明「中国社会学の性格について—于光遠の講演『社会学のマルクス主義の伝統を堅持しよう』から—」、論説資料保存会『中国関係論説資料』、第29号（昭和62年版）所収。（初出は『社会学研究所紀要』（佛教大学社会学研究所）、第8号、1987年、110～111ページ）
- 13) 韓明漢『中国社会学史』—社会学叢書一、天津人民出版、1987年、174～176ページ。

中国社会学年譜（1979年～1981年）¹⁾

王育民編著
星明訳

1979年

1979年3月15日～18日。全国哲学社会科学計画会議準備処が座談会を開催し、60人余りが出席する。席上、胡喬木同志が党中央を代表して社会学の名誉回復を行なう。この会議では中国社会学研究会の成立を決定し、「中国社会学研究

会活動条例」（草案）の採択を行ない、50人からなる理事会での選挙で、費孝通教授を会長に選ぶ。

わが国の社会学の教育・研究活動は、1952年の高等教育機関の調整時に取り消されてから、

1957年の反右派闘争のなかで再び批判されて、20年以上中断する。1979年3月中国社会学研究会が再び成立し、これを中国社会学の回復と新生のシンボルとする。

1979年3月18日。中国社会学研究会が第1回の理事会会議を開催する。全員一致で、中国社会科学院が社会学研究所を設立する決定や大学や専門学校に社会学部を設置する意見を支持する。

1979年3月20日。鄧小平同志が党の理論活動研究討論会で行なった『4つの基本原則を堅持しよう』という発言のなかで、「われわれは政治学、法学、社会学ならびに世界政治の研究をこれまで軽視してきた。今日やはり早く補う必要がある」と指摘する。

1979年5月23日。中国社会科学院が社会学研究所の設立を決定し、国務院に報告して承認を求める。

1979年7月。上海社会科学院が社会学研究所の設立を計画し、社会学理論、老人、青年、婚姻家族、労働就業の5つの研究グループと資料室の設置を予定する。

1979年8月。中国社会科学院が社会学研究所設立準備グループをつくる。メンバーは費孝通、陳道、杜任之、王康、潘乃穆で、責任者には費孝通になる。

1979年9月。上海社会学学会が正式に成立する。この学会は社会学研究に従事する専門家および学識者からなる学術団体である。その主旨はマルクス＝レーニン主義、毛沢東思想を指導として、「百家斉放、百家争鳴」の方針と、理

論は実際と結び付かなければならないという原則を貫き、マルクス主義社会学の建設と発展に努め、社会主義建設に役立つことにある。上海の社会学の理論研究家や現場の人を組織団結させ積極的に学術活動を発展させ、関係部門と共同して社会問題の研究調査を進めたり、関係方面に助言を行なったりする。学会が成立すると間もなく青少年問題、社会福祉、社会学教学、婚姻家族問題、老人問題の5つの研究会および都市社会学研究グループの設立を計画する。

1979年9月22日。中国社会学研究会が第2回目の理事会会議を開催する。

1979年12月12日。華東師範大学政治教育部が社会学研究小グループをつくる。1985年正式に社会学研究室になる。呉鐸教授の主宰のもと、言心哲、王養衡、陳誉、励天予、桂世勲、時蓉華教授の専心指導のもとで、当研究室は社会学研究に志しをもつ青年教師、大学院生や学部生を引き付け、社会学基本原理、都市社会学、現代欧米社会学および国内外の社会学思想史などの領域で科学研究、教学活動を展開する。当研究室は設置されて以来、教学と科学研究の双方を同時に振興する道を堅持し、教学は科学研究を促進し、科学研究は教学を促進してきている。教学以外に、さらに上海市哲学社会科学「第6次5か年計画」の重点項目『都市社会問題研究』の編集の任務や労働人事部から編著を委託された『労働社会学』などの任務を分担して引き受ける。

1980年

1980年1月18日。国務院の承認を経て、中国社会科学院に社会学研究所が正式に成立し、費孝通教授が所長になる。

1980年2月29日～3月1日。中国社会学研究会が北京で第3回目の拡大理事会を開催し、主に80年代の社会学の建設問題を討論する。

1980年3月。上海の復旦大学分校がもと政治学部基礎のうえに社会学部を設置する。自発の原則（自願原則）にもとづいて、第1期生として28名の学生が社会学専攻を選択する。社会

学部は文学史などの基礎科目や公共政治理論科目の開設以外に、学部の専攻として社会思想、社会学理論、方法論、社会心理学、応用社会学の5つの科目を設ける。学部は単位制度（学分制）を実行し、おおそ入学2年以内に基礎科目をやり遂げ、3年生次には主に選択科目を受け、学年論文を書く。4年生次は社会調査実習と卒業論文の作成を行なう。

1980年3月。費孝通教授がアメリカのデンヴァー（Denver、丹佛）大学で応用人類学会

マリノフスキー（馬林諾斯）賞を受け、その受賞大会で「人民の人類学を目指して」（Toward a People's Anthropology, 邁向人民人類学）と題する発表をする。

1980年4月。ハルピン市社会科学研究所が社会学研究室を設置する。その研究方針と研究重点は地元で立脚し、応用に重点を置き、現代化の過程で起った社会問題を研究し、現在の社会発展の法則を探求し、物質文明と精神文明（両個文明）の建設を促進することにある。重点研究課題ないし項目は社会の協調発展、老人問題、人材問題、人口移動問題、婚姻家族問題および青年の犯罪と労働就業の問題である。

1980年5月。南開大学が社会学研究室を設置する。

1980年5月25日～7月31日。中国社会科学院社会学研究所と中国社会学研究会が共同で中国社会学再建後の第1回の社会学講習会を開催する。この講習会に参加した受講者は大学の教員、社会科学研究者および現場の人40人余りである。かれらは北京、上海、黒龍江、遼寧、吉林、新疆、四川、広東、湖北、陝西、貴州など12の省、市、自治区の社会科学研究院（所）から、また北京、南開、人民、復旦、中山、武漢などの10の大学・専門学校と第一機械工業部、司法部、中国共産主義青年団中央、中華全国婦人連合会、『人民日報』などの部門からの参加者である。

今回の講習会は現代の欧米社会学の基本的知識と方法を紹介し、受講者にさらに深く社会学を学ぶ決心を燃え立たせ、わが国の社会学の復活と発展のための種蒔きになる。

1980年6月10～12日。黒龍江省とハルピン市社会学学会がハルピン市科学宮で成立大会を開催する。省、市の宣伝、教育、労働運動（工運）、青年、婦人、公安、司法、労働、民政、苦情処理（信訪）、交通、科学研究に携わる82名の同志が成立大会に参加する。省社連とハルピン市党委員会宣伝部の指導部同志が会議に参加する。また、チチハル、牡丹江、チャムス、大慶、鶏西など11の地区、市から派遣された人も参加する。ハルピン市党委員会宣伝部副部長孫鏐耀同志が成立大会を主宰し、あいさつを行

なう。また、省社連副秘書長範兆義同志が大会であいさつをする。

この大会で主に解決した問題は(1)黒龍江省とハルピン市の社会学学会を組織し、第1回理事会を選挙してつくること、(2)学会規則を採択し、学会の任務を定めること、(3)社会学学会の1年の活動計画を建てることである。

1980年6月26日。黒龍江省とハルピン市社会学学会に所属する婚姻家族・婦人解放問題研究会が討論会を開催し、8名の同志が参加する。討論では、学術研究と本来の仕事との関係をいかにうまく処理するかを探求する。参加者はこの関係をうまく処理するにはできるだけ研究活動を現職から離れないように行なうべきであると思い、こうすることによって調査研究をうまく行ない、現職を研究活動の基礎にできるとした。この会議で確定した研究題目はつぎのようである。(1)現代社会における結婚の基礎、(2)結婚前の軽率な性行為の問題、(3)愛情と道德の問題、(4)社会主義家族。

1980年7月2日。黒龍江省とハルピン市社会学学会所属の青少年犯罪問題研究会が討論会を開催する。会議には10名の同志が参加し、つぎの3つの問題を主に解決する。(1)青少年犯罪問題に対する研究の重要性の認識や切迫しているという認識の高揚、(2)特定研究のテーマの確定および責任者の決定、(3)小グループ活動計画の制定。

1980年7月29日。黒龍江省とハルピン市社会学学会会員代表会議がハルピン市友誼宮で開催される。省内の大学・専門学校、科学研究部門、実際工作部門の120人余りが出席する。省苦情処理室主任・学会理事長の馬俊同志が会議を主宰する。省顧問委員会副主任王路明同志、省社連副主席範兆義、市社連副主席鐘学志が会議に出席し、あいさつをする。省党委員会副書記劉成果同志は書面であいさつを述べる。省党委員会農工部顧問洪樹同志、省人民大表会議常任委員会鄭芳林同志、退職幹部徐咏之同志、省経済研究センター主任程曉候同志、省党委員会組織部顧問雷方俠同志が会議に出席する。この会議では学会の活動を総括し、今後の活動を取り決め、第2回理事会の理事および常務理事を

選挙する。

代表たちは6年(ママ)このかたの(今年6月以来の…星註)学会の活動を回顧し、かれらは学会活動には成果があったことを一致して認める。重大で現実的な社会問題に対して調査と学術討論が進められたこと、社会学基礎理論に対して研究活動が組織されたこと、社会学研究の基本的な人材が養成されたこと、社会学の基礎知識が伝達できたこと、学会の組織建設が強化されたこと、比較的豊富な活動経験が獲得されたこと、等々である。そのために学会の活動は各方面の好評を博した。今後の社会学学会の基本的な任務は省全体の社会学に携わる者を団結組織して、マルクス=レーニン主義の指導のもとで、「百家斉放、百家争鳴」の方針を貫き、理論と実際とを結び付けるという原則を堅持し、理論社会学と応用社会学の研究を進め、黒龍江省の改革と社会主義現代化建設に役立つことである。現在、黒龍江省とハルビンの経済発展戦略を捉えなければならないし、経済・社会協調発展などの問題を捉えなければならない。同時に、社会学基本常識の普及や学会組織建設などの活動をやらなければならない。

1980年8月15日。黒龍江省とハルビン市社会学学会が常務理事拡大会議を開催する。会議は学会理事長孫鉄耀同志によって主宰される。

会ではまずハルビン市社会科学研究so李徳濱同志が北京で社会学講習会に参加した学習の情況の紹介を聞く。

会議ではまた費孝通先生が提出し、黒龍江と上海が請け負った人口流動の研究課題について討論し、これから関係する力を組織し、この方面の調査を行ない、この研究項目を完成させることを決定する。

1980年8月29日。教育部がつぎの教育部(80)教高一字071文件を発する。「わが部は一部の大学で続々と社会学専攻を設置したいと思っている。できるだけ早く社会学教材をつくるために社会科学院社会学研究所、社会学研究会、北京大学で相談して、第1回社会学講習会に参加した人員のなかから8名の同志を選んで、北京大学に集まって『社会学概論』を共同で編集することを決めた」。

1980年9月。中国社会科学院社会学研究所は第1回の受講生がだした意見にもとづき、北京大学と協力して、『社会学概論』教材作成小グループを組織し、『社会学概論』の作成にかかる²⁾。

『社会学概論』の作成は中国社会学再建のための重要な第一歩である。

1980年9月。中国社会科学院社会学研究所と天津人民出版社が共同で出版活動座談会を開催し、社会学叢書を出版することを決める。

1980年9月1日～4日。黒龍江省とハルビン市社会学学会が拡大理事会を開催し、社会学学会理事、一部の会員および関係部門の人々、合わせて80人余りが出席する。

この拡大理事会では中国社会科学院社会学研究所が行なった社会学講習会で中国社会科学院副院長于光遠、わが国の著名な社会学および関連する学問の専門家や学者である費孝通、呉文藻、杜任之、王康、汪子嵩、張芝聯、有義などの同志の発言が伝えられる。また講習会で検討された学術問題が紹介される。最後に、学会理事長孫鉄耀同志によって総括報告がなされる。かれはこの会議で専門家や学者の発言を聞いて、眼が開かれ、思想が解放され、知識が増し、関心が養われたことによって、この会議は学会の研究活動を発展させることに大きな促進作用があったという。また、かれは参加した同志が、広く研究テーマを選ぶように、問題を積極的に研究するように、社会主義建設のために多くの貢献を行なうように動員する。同時にまたかれは学会のこれからの活動を定める。

1980年10月21日。費孝通教授が胡喬木同志に書簡を送り、中国社会学を建てなおす具体的な布石について初歩的な構想を述べる。

1980年10月。中国社会科学院社会学研究所が北京宣武区椿樹街道弁事処東河沿居民委員会に社会調査基地を試験的に建てる。

1980年11月4日～17日。武漢鋼鉄公司が社会学研究小グループを設置する。武漢鋼鉄公司党委員会宣伝部部長斉金堂が長に、宣伝科長陳章相が副長になる。

1980年11月。ハルビン市青年宮と市社会科学研究soが社会学基礎知識を普及し、社会学學術

活動を展開するために、社会学基礎知識講座を開催する。全部で4講座あり、第1講は社会学概論、第2講は社会学発展史、第3講は社会学研究の基本的な方法と歩み、第4講は社会学と青年活動である。第1講から第3講は社会科学研究所の李徳濱同志が、第4講は社会科学研究所の李再龍同志が講義する。講座の参加者は主にハルビン市共産主義青年団の幹部とハルビンの省・市社会学学会委員である。

1980年11月4日～17日。湖北省社会学学会が武昌で成立大会と第1回の学術討論会を開催する。会議は学会規則の採択、第1次理事会の選挙を行ない、湖北省社会学学会社会学研究所と『社会学研究資料』編集委員会を成立させる。

会議では武漢大学教授劉緒貽など56人を理事に選出し（その内21人は常務理事）、社会学の老大家楊開道先生を名誉理事長に、劉緒貽教授を理事長に推薦し選ぶ。副理事長夏邦新をチーフにして、秘書長張隕、副秘書長于真、羅東山、嚴武など5人が活動のための指導グループを組織する。常務理事会は社会学艾瑋生副教授、華中工学院盧振中副院長、武漢大学譚崇台教授、省高級人民法院副院長郭輔軒、省檢察院副檢察長庄乾明、省労働組合宣伝部長達漢、民族学院政治部主任何春光、党学校呉仲炎など9人を副理事長に選ぶ。かれらは各部門の責任者であり、学会の仕事を指導し、支持している。

1980年11月。天津社会科学学会連合会の支持のもとで、王左、蘇駝、王鴻江、楊心恒などの同志が参加して社会学準備小グループを成立させ、天津市社会学学会をつくる準備を始める。

1980年11月。南開大学が社会学専攻を設置する。

1980年12月24日～27日。黒龍江省とハルビン市社会学学会が青少年犯罪問題理論討論会を開催する。公安・檢察・法院、労働者・青年・婦

人、大学・専門学校、小中高校、理論宣伝、新聞出版などの部門の学会会員および関係者、合わせて100人余りが討論会に参加する。遼寧省社会科学院劉洺心同志も参加する。

会は黒龍江省とハルビン市社連会の指導で、社会学学会青年犯罪研究会が組織したものである。省社連副秘書長劉兆義同志が参加し、中共ハルビン市委員会宣伝部副部長・学会理事長孫鏐耀同志が開会の辞を述べ、ハルビン市法院副部長・学会副理事長劉光炎同志が会の総括を行なう。

会は百花斉放、百家争鳴の方針を堅持し、目下青少年犯罪問題を研究する重要な意義をめぐって、青少年犯罪の特徴、原因、法則およびどのような方法で青少年犯罪を防止するかという問題について討論を展開する。会は盛り上がり、多くの積極的な意見が寄せられ、グループの発言以外にも、13人の同志が大会で論文を読み上げる。劉洺心同志が大会で学術報告を行なう。参加の同志は一致して、今回の会は理論と実際との関係が比較的緊密で、考え方は比較的開放的で、討論の領域も比較的広く、そのために収穫は比較的大きいと認める。

会ではまた1981年青少年犯罪問題研究計画を討論する。そしてこの問題を1981年6月の社会学学会年会で継続して討論することを決める。研究の重点は原因や法則を分析することと対策を検討することの両面に置かなければならないとする。みんなはこの研究テーマをやり遂げるためには思想を解放し、自由な思想を妨げるさまざまなものを打破しなければならないと考える。そして、社会学、法学、社会心理学、行為科学、犯罪学などの基本理論を努力して学習せねばならないし、また調査研究活動を真剣に行わなければならないと考える。

1981年

1981年。中山大学に社会学部が設置される。この学部はまず研究生を養成する措置を講じ、教師団の建設を強める。1985年5月に至るまでに、合わせて43人の研究生（研究生クラス14人、修士コース研究生29人）と学部生40人を募

集する。

教師の任用は、控えめにおさえて現在長期名誉教授、客員教授各1人、教授1人、助教授2人、講師2人、助手8人である。

学部を設置して以来、この学部は主要な力を

研究生の養成に注いできている。その指導理念は研究生を養成するにあたって、教室での授業のみならず、知識を伝授すると同時にかれらの知恵能力を開発し、知恵型の高級人材にすることにある。教学と科学研究の実践の必要から、この学部は農村コミュニティ（社区）の鷺江村と都市コミュニティの二龍街の2つの実習基地をそれぞれ設定して、香港社会、珠江三角洲集鎮および深圳市の3つの方面の研究活動を展開する。教学と科学研究以外にも、この学部は1985年までに多くの社会学学術活動を展開する。その主なものは(1)1985年12月、わが国ではじめての社会学応用国際討論会の開催、(2)社会心理学教員研修クラスの開催、(3)中央書記処農村政策研究室が行なった中国農村のサンプル（抽样）調査への参加である。

1981年2月。吉林省に社会学研究会が成立する。

1981年2月26日。中国社会科学院社会学研究所と南開大学が共同で開設した社会学専攻クラスが開学する。この専攻クラスは全国18ヶ所の重点総合大学の第77期在校生と復旦大学分校の社会学部78期在校生のなかから選抜された43名の学生が受け入れられる。その他にも少数の研修生と聴講生がいる。この学生は期限1年の社会学専攻で理論と方法の学習と訓練の後、社会学専攻卒業生として教学や研究に関わる仕事に従事するであろう。

1981年3月4日。天津市社会学学会準備グループと市党委員会政策研究室が共同して催す社会学講座がはじまる。

1981年3月11日～24日。教育部高教一司と中国社会科学院社会学研究所が共同で天津市で『社会学概論』の初稿の討論会を開く。

1981年3月23日。天津市社会学学会が成立大会を開く。市党委員会、市政府、市人民代表大会、南開大学、市社会科学院および市労働組合、青年団、婦連、民政、公安など40数部門の代表が会議に出席する。中国社会学研究会会長費孝通教授が招きに応じて会議に出席する。社会学者趙範、吳澤霖、湖北省社会学学会秘書長張員隕、黒龍江省社会学学会秘書長田傑および天津で高等学院社会学教材を審査して決める討

論会に参加している一部の同志も招きに応じて会議に出席する。

蘇駝同志が学会成立大会で準備小グループを代表して、学会の準備活動状況について総括報告をする。参加者は一致して学会規則を採択し、選挙して理事会をつくる。王左同志が学会成立後の各項目の活動について報告する。席上、費孝通教授があいさつをする。かれは中国社会学研究所の成立以来の2年間、社会学研究が多くの場所で勢いよく発展している状況を、簡単で要領よく回顧し、つぎのように話す。目下社会学研究のなかには解決が急がれる2つの問題がある。1つはさまざまな方法で社会学を研究する人材を早く養成すべきこと、他の1つは理論を実際と結びつけ、調査研究から着手して、中国の国情をはっきりさせるために調査研究基地をつくるべきこと、そしてモデル（典型）調査に力を入れるべきことである。

学会成立後、理事会が第1回の会議を開き、1981年の活動計画を検討する。1981年はまず社会学の普及活動を努力して行なうことを決める。つぎに会員を動員して、本職と結びつけて、各種の特定テーマの研究会やグループを組織し、社会調査を行なって順次天津市社会学研究活動を発展させる。

1981年5月25日。中国社会科学院社会学研究所と中国社会学研究会が北京で共同で第2回社会学講習会を開く。67日間にわたり、7月30日に終了する。

1981年8月1日～11日。『社会学概論』編著グループが北京で第3回の会議を開く。討論を経て、どのようにして中国の特色をもつ『社会学概論』をつくることができるかという認識をさらに深め、各章の順序について新たに合理的な配列を行なう。

1981年8月18日。北京市が社会学学会成立大会を開く。中共北京市委員会書記劉導生、中国社会科学院副院長于光遠、中国社会学研究会副会長陳道、北京市副市長雷潔瓊、北京市政治協商會議副主席羅青および北京地区の社会学理論学者と現場の人、合わせて200人余りが成立大会に出席する。会議はまず北京市社会学学会準備小グループ幹事の雷潔瓊教授が準備過程を報

告し、引き続いて、全会一致で会則を選択し、学会理事47名を選出する。中共北京市委員会書記劉導生同志が北京市委員会を代表して、祝賀を述べる。かれは北京市社会学学会が成立後は関係部門と密接に協力して、強力に社会調査を行なうべきこと、また内容のある科学的調査研究報告を提出し、党と政府が政策を制定する際の、また各項の社会問題を解決する際の根拠となるべきことを希望する。于光遠副院長は会で報告を行なう。かれは北京市社会学学会はさきごろ成立した北京市経済学会と密接に協力して、都市問題を研究する重要な力になるべきであると話す。

中国社会学研究会副会長陳道同志が同研究会を代表して、祝賀を述べる。社会学の老大家の呉文藻、呉澤霖、錢長本の3教授があいさつをする。北京市政協副主席羅青、北京市人口学会秘書長錢玲娟などの同志も会であいさつをする。

大会後、学会理事会は第1回の会議を開き、会長、副会長、秘書長および副秘書長を選挙する。雷潔瓊教授が会長に、袁方教授が副会長兼秘書長になる。また会議ではどのようにして社会調査を発展させるか、どのようにして理論社会学と応用社会学の研究を進めるかについて意見がだされる。

1981年9月5日。中国社会科学院社会学研究所と中国社会学研究会が共同で社会学月例座談会を開く通知をだす。

1981年9月8日。中国社会学研究会会長が会議を開き、年末の理事会会議開催の問題と1982年年会の準備の問題を検討する。

1981年9月10日～12日。黒龍江省とハルビン市社会学学会がハルビン市科学宮で会員大会を開き、中国社会科学院社会学研究所が1981年5月から7月まで北京で開いた第2回社会学講習会の主な講座内容を伝達するとともに、今後の学会活動を検討して取り決める。

省社連副主任兼秘書長趙憲民、省社連副秘書長範兆義、市社連準備処責任者薛連挙、社会学学会副秘書長・省苦情处理室主任馬駿、学会副秘書長・市中級人民法院副院長劉光炎、学会副秘書長・市人民代表常務委員会弁公室副主任劉

永勤および省衛生局副局長劉宗秀、市工商局長郝嘉信、ハルビン医大経済学助教授李永康など80人余りが会議に出席する。

1981年9月11日。北京市社会学学会が雷潔瓊会長の主宰で、第1回の常務理事会を開く。席上、学会の会則にもとづき、また成立大会で中共北京市委員会と中国社会科学院の責任者が提出した要求にもとづき、北京市社会学学会の1981年10月から1982年10月までの活動計画を検討し、採択する。

1981年9月14日。江蘇省社会学学会準備会議が開かれる。会議は江蘇省社連副主席兼秘書長王淮冰同志が主宰する。会に参加した同志はどのようにして江蘇省で社会学を創建するかについて熱心に討論し、江蘇省で社会学を創建する条件はすでに熟したと考える。民主的な協議を経て、呉楨同志を主任とする江蘇省社会学学会準備委員会が誕生する。

1981年9月25日、10月23日、11月24日。中国社会学研究会と中国社会科学院社会学研究所が共同で第3回「月談会」を開く。9月25日の会で、中国社会学研究会と中国社会科学院社会学研究所の責任者が会に参加した同志に社会学「月談会」を開く目的および考え方を説明するとともに、2年来の活動と今後の中国社会学を創建する考え方を簡潔に紹介する。10月23日と11月24日の会で、中国社会学研究会会長・中国社会科学院社会学研究所所長費孝通教授が「三たび江村を訪れる」（三訪江村）と「三たびイギリス・ロンドンを訪れる」（三訪英倫）の印象を生き生きと紹介する。

1981年10月初。費孝通教授が3度目の江蘇省呉江県開弦弓村、すなわち「江村」を訪問する。費孝通教授は訪問後「三たび江村を訪れる」という論文を書く。今回の訪問で、中国社会科学院社会学研究所は開弦弓村にコミュニティ社会調査基地の建設を決定する。

1981年10月6日。中国婚姻家庭研究会が正式に成立する。全国婦連副主席・中国社会学研究会副会長雷潔瓊、中国社会科学院副院長于光遠、中国社会科学院法学研究所副所長韓幽桐が成立大会であいさつをする。全国婦連主席康克清、法制委員会副主席張友漁、民政部部長程子

華、全国婦連副主席羅瓊などの責任者も大会に出席する。

中国婚姻家族研究会の主旨は、マルクス＝レーニン主義、毛沢東思想を指導とし、百花斉放、百花争鳴の方針と理論は実際と結び付かねばならないという原則を貫徹し、各方面の力を組織・協調して婚姻家族の理論研究、実態調査および宣伝教育活動を展開すること、また社会主義的な婚姻家族制度を強固にするために、社会主義精神文明の建設を促進し、わが国の社会主義現代化を実現するために役立つことである。

大会は研究会会則と理事会名簿を採択し、雷潔瓊を会長に、陳少健を秘書長に決める。中国婚姻家族研究会は都市と農村における婚姻の現状、歴史および発展方向について系統的・計画的に調査研究を進めようとする。研究成果を交流できるように婚姻家族に関する報告会や討論会を開催し、関係部門にデータを提供する。また、各種の宣伝活動を展開し、社会主義思想で婚姻家族問題を解決することを積極的に提唱し、大衆が幸福、円満、民主的なむつまじい新家族をつくることを助ける。

1981年10月10日。中国社会学研究会が『社会学通信（通訊）』を創刊する（不定期出版、内部発行）。『社会学通信』は中国社会学研究会編纂の動態的かつ資料的な刊行物である。その主要任務はマルクス＝レーニン主義、毛沢東思想の指導のもとで4つの基本原則を堅持して社会学知識を普及すること、社会問題の調査研究の状況を紹介して国内外の社会学界の動態を報告すること、また社会学研究の文章を発表して新たな中国のマルクス主義社会学を積極的に創立するための通信網になることにある。

1981年10月。復旦大学分校社会学部が主宰して『社会』（社会学叢刊）を創刊する。

『社会』（社会学叢刊）はわが国で初めて公開出版された社会学の読み物である。これは社会を研究して社会に供するもの、理論研究と調査研究を互いに結びつけて学術探求と社会普及を互いに結びつけるものである。また、学術民主を発揚したり学術思想を活発にするために学術交流を促進し、社会学の教学と研究レベルを高

めて社会学の知識の普及に役立てるものである。

1981年10月。北京市社会学学会が青少年犯罪問題研究テーマ会議を開く。席上、中国社会科学院青少年研究所の同志がまず全国青少年犯罪問題計画会議の状況を紹介し、その後、みんなが幅広い討論を行なう。

会では、協議を通して次のような研究課題を手始めに実行することになる。(1)北京市社会学研究所は青年労働者の犯罪調査を進める、(2)共産主義青年団北京市委員会は基層の団委員会の同志を組織し、ホテルで働く青年、農村青年、待業青年の犯罪調査を行なう、(3)市教育科学研究所は中高生の犯罪調査をする。(4)市公安局は経済犯罪と大学生の犯罪調査を計画する、(5)市高级人民法院は死刑の判決を受けた青年犯の犯罪構造の研究を計画する、(6)政法学院は青少年犯罪学の研究を計画する。北京市社会学学会は年末ないし年始に青少年犯罪問題学術討論会の開催を計画する。

1981年11月。江蘇省社会科学院に社会学研究所が成立する。研究所には、理論研究・編訳室、応用研究室、人材開発研究室、新聞メディア研究室を設ける。その研究方向と重点は城鎮（都市と村落）社会学、コミュニティ研究、新聞社会学である。

1981年11月。華中工学院に社会学研究室が成立する。

1981年11月。中国社会学研究会、中国社会科学院社会学研究所および『中国青年』雑誌編集部が共同で社会調査の文章を募集する旨の発表をする。

1981年11月9日午前。北京市社会学学会が就業人口区分規準テーマ討論会を開く。会議には国務院人口センサス（普查）弁公室、中国社会科学院青少年研究所、中国人民大学人口理論研究所、石炭部、市社連、市計器局など10余りの部門の約20人が参加する。会議の中心議題は、就業人口と待業人口の区分規準をどのようにして確定するかについてである。これは1982年の全国人口センサスの1項目となる「職業」の記入に科学的なよりどころを提供するためである。

1981年11月18日。費孝通が英国王立人類学協会の1981年ハクスレー（Huxley, 赫胥黎）記念会でハクスレー賞を受ける。席上、「三たび江村を訪れる」³⁾の学術報告をする。

1981年12月11日午前。北京市社会学学会が婚姻家族問題座談会を開く。中国社会科学院哲学研究所、民族研究所と研究生院、中央党学校、中央团校、公安部、首都医院、北京市託児所・幼稚園弁公室、北京市西城区团委、北京市豊台区婦連、北京日報、北京社会科学研究so所などの部門の代表約20人が参加する。北京市社会学学会会長雷潔瓊が会議に参加し、あいさつをする。

座談会では、ここ1、2年来、婚姻家族にみられるつぎの問題を主に討論研究する。(1)結婚相手がみつからないという問題、(2)結婚式をはでにやって浪費する風潮が広まっている問題、(3)三角関係がもとで生じた離婚紛争の問題、(4)中高生（甚だしいばあいは小学生）の恋愛問題、(5)家庭教育と児童保健の問題である。

1981年12月13日。南開大学社会学部専攻クラスが卒業式を行なう。全国18の高等学院から来た43人の学生が1年間の学習を経て、今後社会学の教学と研究活動に従事するために一応の基礎を築く。教育部の批准を経て、この専攻クラスの基礎の上に、社会学修士の学位を与える研究生クラスを開く。試験をパスした15名が採用される。

1981年12月12日～15日。湖北省社会学学会が華中農学院で100人余りの会員代表が参加する年会および社会調査方法討論会を開く。会議は学会成立1年余りの活動を総括し、調査報告、論文および関係資料の40編余りを交流し、1982年の学会活動の一応の計画を立案する。

年会は社会調査報告書の交流にもとづき、社会調査の方法の問題を真剣に討論する。年会では、中国社会学研究会の同志および武漢を訪問しているアメリカの学者が学術報告をする。

社会学学会の指導を強めて都市社会学、農村社会学、民族社会学の研究活動を一步一步繰り広げるために、年会は中共武漢市委員会宣伝部副部長郭治澄、華中農学院党委員会書記趙抱一、中南民族学院副院長賈清波を学会副理事長

に補欠選挙する。

1981年12月15日。上海市社会学学会が1981年の年会を開く。この年会には会員および関係方面の代表900人余りが参加する。中国社会科学院副院長于光遠、中共上海市委員会書記・市社連主席夏征農、中国社会学研究会会長・中国社会科学院社会学研究所所長費孝通、中国社会科学院社会学研究所副所長吳承毅などの同志が年会であいさつをする。会長曹漫之が学会を代表して会務を報告する。

年会では、学会所属の青少年研究会、社会福祉研究会、社会学教学研究会および婚姻家族研究会（準備グループ）、老人問題研究会（準備グループ）がそれぞれ分かれて学術交流、会務活動を行なう。また参加者はどのようにして社会学研究と教学を展開するか、どのようにして学会建設を強めるかなどの問題について意見を発表する。

1981年12月16日～1982年1月16日。北京、天津、上海、南京地区の10部門の19名の社会学者で組織された「江村」調査グループが開弦弓村で始めての共同調査を行なう⁴⁾。中国社会科学院社会学研究所費孝通、吳承毅、張之毅などの同志が顧問になる。

1981年12月22日～23日。中国社会学研究会理事会在北京で第4回の拡大理事会会議を開く。会議の主要な内容はつぎの通りである。(1)中国社会学研究会成立3年来の社会学教学、科学研究および社会調査などの展開の情況の交流、(2)1982年5月に社会学年会を開催する問題の検討。

会議は1982年5月に年会を開くことを確定する。会議では、中国社会科学院社会学研究所副所長吳承毅を現理事会の理事に追加して選ぶ。会議はさらに吳承毅、王康同志を責任者として、北京および関係地区の同志に依頼し年会準備グループを成立させる。

1981年12月24日午前。北京市社会学学会が北京市中山公園で第1回の大規模な学術報告会を開く。費孝通教授が「三たび江村を訪れる」と題する学術報告を行ない、約500人が参加する。

1981年12月。南開社会学クラス「同窓会」が南開大学で成立する。「同窓会」は南開大学社

会学専攻クラスの43名の同窓とその他の10数名の研修生と聴講生からなっている。同窓会を成立した目的は主に関係を強めて互いに情報を交わしたり資料を交換し、一致団結して祖国の社会学事業に貢献することである。

(1990. 2. 13. 訳)

註

- 1) これは、遼寧社会科学院社会学研究所・中国社会科学院社会学研究所「社会学研究」編輯部合編、『中国社会学手冊—機構・人員・大事記—1979～1986—』（1988年5月刊）のなかの「中国社会学重建以来の大事記」（中国社会学回復以来の年譜）の1部分176～197ページを訳したものである。本来ならば、1979～1986年の8年分全部を掲載すべきだが、訳者が1989年12月29日から1990年1月2日にかけて上海で筆写できたのが、ここに訳出した3年分22ページ分である。

なお、中国社会学の95年間にわたる簡便な年譜（1891年から1986年まで）については、韓明漢著『中国社会学史』—社会学叢書—、天津人

民出版社、1987年のなかの「中国社会学史大事記」（中国社会学史年譜）の訳とともに、事実関係をいくつかの資料で補ったものを費孝通著・星明訳「社会学について再び語る」の資料として『ソシオロジ』（第108号、1990年5月）に載せておいたので参照されたい。

- 2) この『社会学概論』—試講本—は、天津人民出版社から1984年5月に出版された。
- 3) これは、Fei Hsiao Tung, Chinese Village Close-Up, New World Press, Bei Jing, 1983 に収録されており、この本は小島晋治ほか訳『中国農村の細密画—ある村の記録1936～82—』（研文出版、1985年）に全訳されている。（収録は訳書、「今日の開弦弓村—1981—」245～261ページ）
- 4) このグループが行なった調査結果の一部は、同上訳書に収録されている（収録は訳書、「開弦弓村調査グループの調査報告—1981—」, 245～321ページ）

（本稿は平成元年度佛教大学学会特別研究費による研究の一部である。記して感謝の意を表明したい。）

【資料】 中華人民共和国上海図書館所蔵・社会学に関する文献目録¹⁾ (中文編) (1902年～1948年まで)

著 者	書 名	発行所	発行年	備 考
001 高田保馬著 杜李光訳	社会学 (万有文庫第1集, 百科小叢書)	上海商務	1933	
002 毛起鵠編著	社会学 (青年基本知識叢書)	上海正中書局	—	
003 毛起鵠編著	社会学 (青年基本知識叢書)	江西正中書局	1944	版次1
004 毛起鵠編著	社会学 (青年基本知識叢書)	重慶正中書局	1943	版次初
005 潘宗元編述	社会学	成都昌福公司	1914	
006 唐仁編著	社会学	上海平凡書局	1929	
007 欧陽鈞編訳商務編訳所校訂	社会学	上海商務	—	
008 岸本能武太著 章炳麟訳	社会学 (上下冊)	上海広智書局	1902	
009 洪江保著 金鳴鑾訳	社会学	上海開明書店	1902	
010 杉森孝次郎	社会学 (日文版)	早稲田大学出版部	1927	
011 遠藤隆吉著 王兆熊編	社会学	—	—	版權頁なし
012 F. H. Hankins 華鼎彝訳	社会学 (社会科学史綱第6冊)	商務	1940	初版
013 F. H. Hankins 華鼎彝訳	社会学 (社会科学史綱第6冊)	商務	1944	
014 孫本文	社会学A B C (A B C叢書)	上海A B C叢書社	—	
015 姜君辰	社会学入門	香港文化供应社	1946	港1版
016 德普延年編輯	社会学入門 (学生門徑叢書)	上海世界局	1924	版次3
017 A. Lewis 高維翰訳	社会学入門	上海水沫書店	1930	初版
018 王平陵編	社会学大綱	上海泰東圖書局	1927	再版
019 朱聚仁, 曹源文編訳	社会学大綱	上海民智書局	1927	4版
020 李達講述	社会学大綱	—	—	版權頁なし
021 李達	社会学大綱	上海筆耕堂書店	—	
022 李達	社会学大綱 (上海法政学院講義)	—	—	
023 楊開道等 孫本文主編	社会学大綱 (上下冊・社会学大編第一種)	世界書店	—	
024 余天休	社会学大綱	北平文化学社	1931	初版
025 J. L. Gillin & F. W. Blackmar 呉澤霖・陸德音	社会学大綱	世界書店	1935	初版

026	J. L. Gillin & F. W. Blackmar 周谷城編訳	社会学大綱	上海大東書局	1933	
027	孫本文	社会学上之文化論	北平朴社	1927	初版
028	魏重慶編著	社会学小史（百科小叢書）	長沙商務	1940	初版
029	E. Durkheim 許德珩訳	社会学方法論	上海	—	
030	卜愈之編著	社会学及社会学問題（高中師範教本）	世界書局	1931	
031	毛起鵠編著	社会学及社会学問題	民智書局	—	
032	C. A. Ellwood 趙作雄訳	社会学及現代社会問題	上海商務	1920	初版
033	馮義康	社会学史要	社会評論社	1932	初版
034	李劍華	社会学史綱（社会学叢書 第13種）	上海世界	1930	
035	易家鉞	社会学史要（共学社叢書通俗叢書）	上海商務	—	
036	孫本文	社会学用書挙要（青年學術叢書）	上海中国社会科学会	1934	初版
037	国立編訳館編訂	社会学名詞	正中書局	1946	滬1版
038	楊幼炯	社会学述要（社会科学叢書之一）	上海泰東圖書局	1927	
039	楊幼炯	社会学述要（社会科学叢書之一）	上海泰東圖書局	—	
040	陳序經	社会学的起源（嶺南大学西南社会經濟研究所專刊乙集第二種）	廣州嶺南大学西南社会經濟研究所	1949	初版
041	陳毅夫	社会学的基礎知識	南京印書館	1928	初版
042	孫本文	社会学的領域（社会学叢書第一種）	上海世界	—	
043	重克色利羅德 吳念慈訳	社会学底批判	上海南強書局	1929	
044	常乃惠編	社会学要旨（青年叢書）	上海中華	—	
045	劉深澤	社会学要論（上卷）	南京新京書社	1932	初版
046	蔡毓驄	社会学研究法（黎明小叢書）	上海黎明書局	1930	初版
047	程其保編	社会学科之教材与教授法（師範叢書）	長沙商務	1939	初版
048	朱亦松	社会学原理	上海商務	—	
049	姜蘊剛講述	社会学原理（華西大学中国社会史研究叢書第一種）	成都華西大学中国社会史研究室	1944	初版
050	孫本文，吳景超，黃文山	社会学（上下冊・部定大学用書）	商務	—	
051	孫本文	社会学原理（大学叢書）	上海商務	—	

052 應成一	社会学原理（上下卷・社会科学叢書）	上海民智書局	—	
053 F. W. Blackmar 陶集勤訳	社会学原理	上海全民書局	1929	4 版
054 F. W. Blackmar 陶集勤訳	社会学原理	上海漂溪図書館	—	
055 F. W. Blackmar 陶集勤訳	社会学原理	上海新文化書社	1928	3 版
056 R. M. MacIver 張世文訳	社会学原理	商務	1934	再版
057 張有桐	社会学原理	—	—	版權頁なし
058 蕭瑜編訳	社会学書目録	北平立達書局	1934	初版
059 王伯侔	社会学教程（社会科学名著之11）	上海言行出版社	1939	初版（滬）
060 王伯侔	社会学教程	上海神州国光社	—	
061 文公直主編 程逸民編輯	社会学問答	上海大中華書局	1936	
062 納武津著 甘浩訳	社会学問答（百科問答小叢書）	上海商務	1925	初版
063 毛起鵷編著	社会学問答（百科常識問答叢書之1）	上海大東書局	1931	再版
064 F. Giddings 吳建常訳	社会学提綱（教育志叢第1編）	日本教科書訳輯社	1903	市川源三訳からの重訳
065 郭伯棠編著	社会学概要（考試準備各科概要叢書 社会経済）	上海世界	1929	
066 瞿世鎮編 林天祺校	社会学概要	上海三民図書館 書公司	1948	
067 李哲愚編	社会学概要（中央警察官学校構文）	—	—	版權頁なし
068 汪公亮編	社会学概論（黄英俠蔵書）	北平華北大学	1935	
069 高田保馬著 伍紹垣訳	社会学概論（華通社会学叢書）	上海華通書局	1931	初版
070 高田保馬	社会学概論	—	—	版權頁なし
071 徐宗澤	社会学概論	上海聖教雜誌社	1934	
072 陳翊林	社会学概論（社会科学叢書）	上海中華	—	
073 許德珩編著	社会学概論	上海商務	1928	初版
074 湯增揚 上海中国社会科学会主	社会学概論	上海大東書局	1933	
075 湯增揚	社会学概論（社会科学基礎叢書之1）	上海大東書局	1932	
076 加田哲二著 劉樞琴訳	社会学概論	上海開明書店	—	

077	E. S. Bogardus 瞿世英訳	社会学概論（新学制高級中学教科書）	上海商務	—	
078	Azoclopedia 張我軍訳	社会学概論	上海北新書局	1929	初版
079	鄭若谷	社会学概論及現代社会問題研究大綱	勞工工廠部印	1929	初版
080	馮和法編 孫寒冰校	社会学与 sociology 問題	上海黎明書局	—	
081	Ogburn & Goldeweiser 駱笑帆訳	社会学与其他科学之關係	上海大東書局	—	
082	厚生 等	社会学与教育（教育叢書第45種）	上海商務	1925	初版
083	T. S. Roucek 許孟瀛訳	社会学与教育	商務	1947	初版
084	F. Engels 高希經等	社会学說体系（上下冊）	社会經濟学会	—	
085	馮品蘭編纂 孟憲文・ 湯蔭人校	社会学綱要	上海商務	—	
086	錢然編著	社会学綱要（考試叢書）	上海法學社	1929	
087	劉天予編	社会学綱要（中華百科叢書）	上海中華	—	
088	張資平編	社会学綱要（學芸叢書9）	上海中華學芸社	—	
089	M. Ginsberg 張雲訳	社会学導言（新中学校文庫・社会科学小叢書）	上海商務	1947	再版
090	M. Ginsberg 張雲訳	社会学導言（社会科学小叢書）	上海商務	1936	初版
091	蕭玉等 社会学講座社編	社会学講座（第一冊）	社会学講座社	1931	不連
092	許德珩	社会学講義（上卷）	北平好望書店	1936	初版
093	潘梓年	社会学講義（上海法政學院講義）	—	—	
094	高田保馬著 杜李光訳	社会学総論（社会科学叢書）	上海商務	1930	初版
095	高君哲等編訳	社会学辞彙（英漢対照，友聯叢書第一種）	北平友聯社	1931	初版
096	林之学編著	社会總覽（小学入学準備總覽）	上海東方書店	1937	11版
097	李定夷編著 包醒独校甚	社会叢談（社会小説）	上海国華新記書局	—	
098	J. Verdier 聽鵬訳	社会叢談	上海袖湾印書館	1928	4版
099	危天笑等 大東出局編訳 所編	社会鏡（上中下冊）	上海大東書局	1924	3版
100	姚民哀等	社会鏡 等	—	—	不連
101	上海新劇同志会編輯	社会鐘（第一至七幕，劇本）	同編者	1912	
102	王立謙編輯	社会鑑	上海商務	—	

103 河上肇著 瀧綺雨訳	社会変革底必然性	上海創造社出版部	19—— ママ	
104 P. Sorokin 鐘兆麟訳	社会変動論	世界書局	1932	
105 孫本文	社会変遷	上海世界書局	1929	
106 孫本文	社会変遷 (社会学叢書第8種)	上海世界	—	
107 陳安仁	社会観	上海泰東図書局	—	

註

- 1) このリストは、筆者が1989年9月14日および同年12月29日に、上海図書館の古籍室の目録カードを筆写したものから作成したものである。時間の関係で「七画」の「社」の社会学しか筆写できなかったが、「社」の場所にはこれ以外にも社会調査関係の本が28冊、社会進化論関係のものが33冊あった。当然「社」以外ではじまる社会学書も数多くあろうが、時間の関係でできなかった。